

# 宝の海から

白浜で出会った生きものたち

56

京都大学助教授 久保田 信 (京都大学 瀬戸臨海実験所)

## 北浜のスナガニ類の変遷

毎年夏から秋にかけて、砂浜に直径1センチほどの丸い穴があちこちに開いているのを見かけたことがあるだろうか。これはスナガニ類の巣穴である。



北浜の砂浜につくったツノメガニの巣穴の入り口

美大島以南にしか分布し、北浜のようないとされていた南方系が、最近の研究で影響を受ける場所には



内之浦干潟親水公園ではさみを振り上げるチゴガニ (田辺市新庄町で)

# 干潟でダンスするカニたち

南方系スナガニ類は甲幅3センチあまりになる中形のカニで、わが国ではまれな種も含めて4種が知られる。もっとも北まで分布しているのがスナガニで、東北地方まで見られ、京都大学瀬戸臨海実験所近くの北浜では少なくとも12年ほど前から見られるようになった。

1999年夏、これまでに見ないほど多くの巣穴を発見した。数えてみたところ442個もあった。地球温暖化とともにますますその数が増加するのではないかと継続調査してきたが、予想に反して巣穴の数は減少し、

和田先生によると、ツノメガニは、かつては奄美にのみ生息していたが、調査された結果、南方系のツノメガニであることが分かった。和田先生の研究グループは、ここ数年スナガニ類の分布調査を全国で実施されており、北浜の個体群も2003年に採集された。

調査で、相模湾や紀伊半島から未成熟個体が記録され、分布していることが分かったという。潮の影響を受けない北浜最上部には、さらに南方系のナンヨウスナガニが03年の調査で発見できたことである。

スナガニ類には他のカニにあまりみられないくつが特徴がある。雄だけでなく雌の左右のハサミ脚の大きさが違っている。大きいハサミ脚は、餌取りや巣穴掘りにはあまり使用しない。小さいハサミでもつばら砂をすくって口に運び、中に含まれている有機物を食べる。食べた後は砂団子として残す。

この行動を行う。見事なダンスの意味は、雌雄が見せる縄張りの誇示で、他個体への自己存在のテリトリーのアピールである。11月下旬でも内之浦の干潟には無数の巣穴が見られ、干潮時には朝から活動しているが、ダンスはあまりしないようである。

見えるように水槽のガラス面にはマジックミラーを張り付けて、チゴガニ側からは観客が見えなくする配慮をしている。館内とはいえ、最近、気温が下がってきたので、あまりダンスを披露しなくなった。

内之浦にはチゴガニよりもずっと大きいハクセソシオマネキがいる。白いハサミ脚を扇状に振って潮が込んでくるのを招く。ダンスがよく見られる。

シオマネキ類に類似するところからこの和名がついた。体よりも大きく見えるハサミ脚を打ち振るうのは雄で、雌に対してみせるディスプレイである。わが国にいるシオマネキ類は多くの種が沖縄方面に分布するが、種ごとにハサミ脚の形そのものも色、その振り方も異なっている。たとえ数種が同じような干潟で暮らしていても、雌はその振り方で自分と同じ種の雄だとわかる仕組みなのである。種内では、振り方のうまさや交尾相手を選んで示されている。



北浜の波打ち際で死亡していたツノメガニの雌

(2004年10月15日)

スナガニ科に属するカニ

和田先生によると、ツノメガニは、かつては奄美にのみ生息していたが、調査された結果、南方系のツノメガニであることが分かった。和田先生の研究グループは、ここ数年スナガニ類の分布調査を全国で実施されており、北浜の個体群も2003年に採集された。